

随伴経験、友人への安心感、情動知能及び孤独感の関係

豊田弘司

(奈良教育大学 学校教育講座 (教育心理学))

Relationships among Experience of Contingency, Sense of Security with a Friend, Emotional Intelligence and Loneliness

Hiroshi TOYOTA

(Department of Psychology, Nara University of Education)

要旨：大学生を対象にして、居場所としての友人への安心感、情動知能の下位能力（情動の表現と命名（EL）、情動の認識と理解（PU）、情動の制御と調節（MR））、随伴経験・非随伴経験と孤独感の関係を検討した。これらの変数間の相関係数を算出した結果、随伴経験量と友人への安心できる程度との間に正の相関があり、友人への安心できる程度は孤独感と負の相関があった。パス解析によっても、このことは証明され、随伴経験及び非随伴経験量によって友人への安心感が高まり、孤独感が抑制される可能性を示唆した。また、随伴経験量とMRとの間に正の相関、MRと孤独感の間に負の相関、非随伴経験とMRの間に負の相関、MRと孤独感の間に正の相関が認められた。この結果は、随伴経験及び非随伴経験量によってMRの水準が高まり、その情動の制御能力の高まりが、孤独感を抑制する可能性も明らかになった。ただし、孤独感への抑制効果は、友人への安心感がMRのそれよりも大きいことも示された。

キーワード：居場所 “*Ibasho* (the person who eases one's mind)”、随伴経験 experience of contingency、情動知能 emotional intelligence、孤独感 loneliness

1. はじめに

不登校や学級崩壊の増加が叫ばれている現在の教育現場では、児童・生徒の学校適応の重要性が増しているといえる。それゆえ、適応に関する客観的な指標を設けることは、重要な課題である。適応には快な感情や行動傾向に関する肯定的な側面の代表的な指標として自尊感情（山本・松井・山成,1982）や自己受容感（板津, 1989）がある。一方、不快な感情や行動傾向に関する否定的な側面の代表的指標としては、孤独感（諸井, 1991）が重要である。孤独感が重要であるのは、Maslow（1962）による欲求の階層構造によれば、児童・生徒の知識欲求は、下位階層にある対人的欲求（親和欲求）が友人との交流によって満たされていないからである。すなわち、対人的欲求が満たされず、孤独感を感じていると、上位構造にある知識欲求が生じてこないで、一般的な学習意欲が喚起されないのである。

では、学習意欲を妨害する可能性のある孤独感は、どのような要因によって規定されるのであろうか。豊田・大賀・岡村（2007）は、居場所（「安心できる人」と孤独感の関係を検討している。そして、居場所として「自分」を選択した者は、「母親」や「友人」を選

択した者よりも孤独感が高いことを明らかにした。また、豊田（2009）では、友人や恋人に対する安心できる程度が孤独感と関連することが示された。すなわち、友人や恋人への安心感が高い者は、孤独感が低いということである。さらに、豊田・牧田・木原（2012）においても、女子では母親への安心感と孤独感との負の相関も見いだしたが、男女ともに友人への安心感が高い者ほど、孤独感が低いことが明らかにされている。このような一連の研究からは、居場所の中でも、友人への安心感（安心できる程度）が孤独感を規定する重要な要因であることがわかる。

ただし、居場所と孤独感の関係には、情動知能（Emotional Intelligence; EI）の水準が関与する。EIは、情動を扱う個人の能力であるが（Salovey & Mayer, 1990）、下位能力として、自分の情動を表現する能力（情動の表現と命名;EL）、他者の情動を理解する能力（情動の認識と理解; PU）及び自分の情動をコントロールする能力（情動の制御と調節; MR）が含まれている。豊田ら（2007）は、居場所が「自分」であった者でも、EIの水準が高い者は「友人」や「母親」が居場所である者と孤独感の水準は同じだったのである。また、Toyota（2009）では、重回帰分析によって、EIの下位能力であるEL及びMRが孤独感を抑制することを

示している。したがって、孤独感を規定する重要な第2の要因はEIということになる。

このように、友人への安心感とEIが孤独感を規定するのは明らかになってきたが、友人への安心感とEIは何によって規定されるのであろうか。随伴経験 (experience of contingency) とは、努力が成果に結びついた経験であり、反対に成果に結びつかない経験を非随伴経験 (experience of non-contingency) と呼ぶ。牧・関口・山田・根建 (2003) は、対人関係における随伴経験尺度を作成して、中学生において、随伴経験の多い生徒は、自己効力感の高いことを明らかにしている。また、豊田 (2006) は、牧ら (2003) の作成した尺度を用いて、大学生における随伴経験を測定し、随伴経験量が多い者ほど、自尊感情の高いことを示している。さらに、豊田ら (2012) は、随伴経験量と友人への安心感 (安心できる程度) の間の正の相関を見いだしている。すなわち、随伴経験量が多い者ほど、友人に対する安心できる程度が高いことを示したのである。それ故、随伴経験量が、友人への安心感を規定することになる。また、豊田・島津 (2006) では、随伴経験量とPU (情動の認識と理解) 及びMRとの間に正の相関を見いだしている。この結果は、随伴経験量が多い者ほど、EIにおけるPUとMRの能力が高いことを示すものである。したがって、随伴経験量は、EIの水準も規定することになる。このように、随伴経験、友人への安心感、EI及び孤独感の関連性は断片的には検討されてきたが、これらの変数間の関係を一括して検討したわけではなかった。

そこで、本研究では、随伴経験量、友人への安心感、EI及び孤独感の関係を検討する。上述した研究から、随伴経験量は、友人への安心感を高め、その安心感が孤独感を抑制することが予想される。この予想を検討するのが、本研究の第1の目的である。また、上述の諸研究からは、随伴経験量がEIを高め、そのEIが孤独感を低めることが予想される。特にMRは情動の制御に関する能力であるので、随伴経験量がMRを高め、その結果、孤独感が抑制されると予想ができる。この予想を検討するのが、本研究の第2の目的である。

2. 方法

2.1. 調査参加者

調査への参加者は、2013年及び2014年に著者の授業を受講した大学生であった。合計290名以上の受講生が調査に参加してくれたが、後述するように、2週にわたる調査であるために、いずれかの調査を欠席する学生がいた。その結果、254名 (男性109名、女性145名) が分析の対象になった。これらの学生の平均年齢は18歳9か月 (18歳1か月～23歳6か月) であった。

2.2. 調査内容

2.2.1. 主観的随伴経験尺度

対人関係における随伴経験及び非随伴経験量を測定するために、牧ら (2003) が開発した尺度であり、豊田 (2006) において大学生にも適用されている。この尺度は、対人関係における随伴経験を調べる15項目 (e.g. 「友人の悩みを聞いてあげたら、感謝された」) と非随伴経験を調べる15項目 (e.g. 「自分は信用していたのに、友人が自分を信用してくれなかった」) からなり、回答は4件法 (「全く経験したことがない (1)」「あまり経験したことがない (2)」「少しは経験したことがある (3)」「よく経験したことがある (4)」) が用いられた。

2.2.2. 友人の安心感尺度

豊田 (2009) では、「あなたは、以下の場合どの程度安心できますか?」という質問に対し、「自分一人」「母親」「友人」「恋人」「祖父母」「父親」「兄弟」と一緒にいる時の7つの場合について、「ほとんど安心できない (1)」から「非常に安心できる (6)」までの6件法で回答を求めた。本研究では、分析の対象は、「友人と一緒にいる時」であるので、「友人と一緒にいる時」についてのみ回答してもらった。なお、調査参加者には該当する人物 (「友人」) がいない場合であっても想像して安心できる程度を評定するように求めた。それ故、すべての参加者が特定の友人に対する安心できる程度を回答しているわけではない。この調査項目は、上記の主観的随伴経験尺度とともにA4判用紙に印刷されていた。

2.2.3. J-ESCQ

Toyota, Morita & Takšić (2007) によって作成されたJ-ESCQを用いた。この尺度は、情動の表現と命名 (EL) (e.g. 「私は、自分がどのように感じているかを表現することができる。」、情動の認識と理解 (PU) (e.g. 「私は、誰かが罪悪感を感じている時には、それに気づく。」) 及び情動の制御と調節 (MR) (e.g. 「私は、不快な感情をおさえて、良い感情を強めようとしている。」) という3つの下位尺度に8項目ずつ計24項目から構成されている。各項目の評定については、「いつもそうである (5)」「だいたいそうである (4)」「時々そうである (3)」「めったにそうでない (2)」「決してそうでない (1)」の5件法を用いている。

2.2.4. 孤独感尺度

諸井 (1991) による改訂版UCLA孤独感尺度日本語版を用いた。この尺度は、20項目 (e.g. 「私は自分の周囲の人たちと調子よくいっている。」 (逆転項目)、「私の興味や考えは、私の周囲の人たちとはちがう。」) からなっている。各項目に対する評定については、「た

Table 1 随伴、非随伴経験、友人の安心感、情動知能、及び孤独感の平均及び標準偏差

		随伴経験	非随伴経験	友人への安心感	孤独感	情動知能		
						EL	PU	MR
男子								
	M	45.41	29.15	4.89	37.67	25.98	25.59	28.98
	SD	7.59	6.78	0.93	9.51	5.95	5.13	4.85
女子								
	M	48.89	29.15	4.99	33.78	25.55	24.95	28.76
	SD	5.65	6.88	0.76	7.3	5.97	5.3	4.13

Table 2 随伴経験、友人の安心度、情動知能、エゴグラム及び孤独感の関係 (r)

(右上欄には男子、左下欄には女子)

尺度		随伴経験	非随伴経験	友人への安心感	孤独感	情動知能		
						EL	PU	MR
随伴経験			-.23	.31	-.53	.33	.39	.38
非随伴経験		-.04		-.27	.36	-.06	-.05	-.26
友人への安心感		.27	-.18		-.48	.25	.22	.41
孤独感		-.41	.17	-.47		-.19	-.21	-.36
情動知能 EL		.29	-.11	.29	-.36		.41	.44
PU		.31	-.02	.13	-.31	.42		.37
MR		.22	-.17	.28	-.37	.25	.24	

びたび感じる (4)」「どちらかといえば感じる (3)」「どちらかといえば感じない (2)」「けっして感じない (1)」の4件法である。この孤独感尺度は、上述したJ-ESCQとともにA4判用紙に印刷された。

2.3. 調査手続き

週1回開講される著者の授業終了後、2週にわたって、集団的に調査が実施された。調査は任意であり、実施した内容については次週に集計結果を報告することを約束し、協力を依頼した。第1週に友人の安心感尺度及び主観的随伴経験尺度、第2週にJ-ESCQ及び孤独感尺度を実施した。著者が調査者となって、各項目を読み上げ、調査参加者は、項目ごとに回答していた。どの尺度も、5~10分で全員が回答を終えた。参加者全員が資料の提供に応じてくれた。このような調査を2013年5月及び2014年5月に実施した。

3. 結果と考察

Table 1には、随伴・非随伴経験、友人への安心感、EI、及び孤独感の各尺度得点の平均と標準偏差が示されている。どの尺度得点においても性差は認められなかった。また、Table 2には、尺度得点間の相関係数(r)が男女別に示されている。有意な相関係数は、太字で示されている。

3.1. 随伴経験、非随伴経験、友人への安心感及び孤独感の関係

随伴経験量と友人への安心感とは正の相関(男子は $r=.31$ 女子は $r=.27$)であり、友人への安心感と孤独感の間には負の相関(男子は $r=-.48$, 女子は $r=-.47$)があった。友人への安心感と孤独感との負の相関は、友人に対して安心している者は、孤独感が低いということを示唆している。この結果は、豊田(2009)において、友人及び恋人に対する安心度が孤独感と負の相関を示したことと一致する。したがって、友人への安心感は孤独感を抑制することが追証されたのである。ただし、本研究の第1の目的は、随伴経験量が友人への安心感を高め、その安心感が孤独感を抑制するという予想を検討することであった。随伴経験量と友人への安心感の間には正の相関、友人への安心感と孤独感の間には負の相関があったので、予想が支持される可能性はある。

そこで、構造方程式モデリングによる分析を行った。そこでは、Fig.1に示す仮説モデルを設定し、随伴、非随伴経験、友人及び孤独感の観測変数を用いたパス分析を行った。図中の単方向の矢印の数値は標準化パス係数、双方向のそれは相関係数を示している。また、目的変数となる観測変数に設定する誤差は省略してある。随伴経験から孤独感への直接効果は-.19であるが、随伴経験から友人への安心感を経て孤独感への間接効果は-.29であった。この結果は、随伴経験量が友人への安心感を高め、その安心感が孤独感を抑制するとい

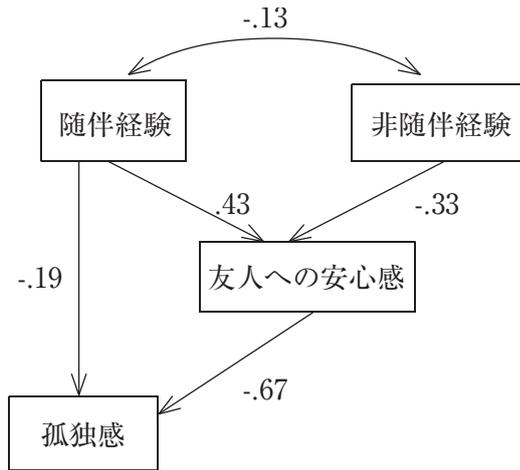


Fig.1 4つの観測変数間の関係図 (第1の目的)

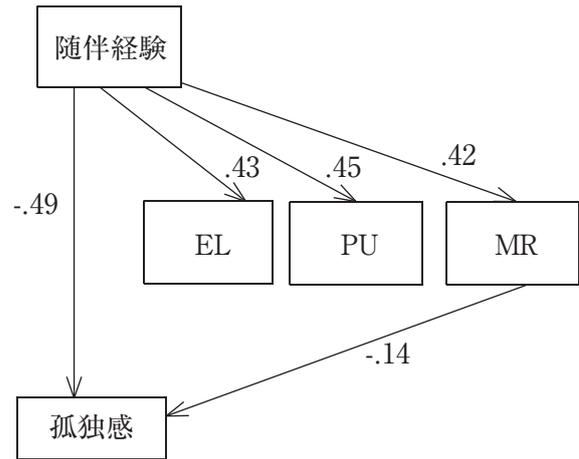


Fig.2 5つの観測変数間の関係図 (第2の目的)

う予想を支持した。

これまでの研究で用いた随伴経験尺度は、対人関係に関する随伴経験を扱うものであり、その内容には友人だけでなく、家族との関わりに関する項目も含まれている。孤独感は友人との関係だけでなく、母親、父親、兄弟等の家族との関係によって規定される場合もある。豊田ら (2012) でも随伴経験量と母親への安心できる程度との間には有意な正の相関が得られている。しかし、その母親への安心できる程度と孤独感の間には有意な正の相関は得られていない。これらの結果を考慮すると、対人関係における随伴経験は友人や母親への安心感を増すが、その中で孤独感を抑制する可能性が高いのは、友人への安心感ということになる。調査対象が大学生であることを考慮すると、大学生にとっては、母親への安心感よりも友人への安心感が生活により密接な関係を持つことが結果に反映されているのかもしれない。また、孤独感は、誰か安心できる人がいることによるのみ規定されるのではなく、対人関係において随伴性を認識できたことによって、抑制されることも考えられる。すなわち、人に対する自分の努力が相手からの好意的な反応として返ってきた場合には、自己効力感 (牧ら, 2003) や自尊感情 (豊田, 2009) が向上することが報告されている。したがって、自己効力感や自尊感情が向上することによって、孤独感が抑制される可能性は否定できない。従来の適応の指標としては、自己効力感や自尊感情が肯定的な指標、孤独感が否定的な指標としてとらえられてきた。ただし、この両者の関係については十分に検討されていない。前者が高まれば、後者が低くなるのか、あるいはお互い独立しているのかを明らかにする必要がある。

3. 2. 随伴・非随伴経験、MR及び孤独感の関係

本研究の第2の目的は、随伴経験量がEIを高め、

そのEIが孤独感を低めることという予想を検討することであった。特に、随伴経験量がMRを高め、その結果、孤独感が抑制されるという関係に注目した。Table 1では、随伴経験量とMRの間に正の相関が認められた (男子は $r=.38$, 女子は $r=.22$)。この結果は、豊田・島津 (2006) と一致しており、随伴経験量が多い者は、MRの水準が高くなることを示している。しかし、本研究で注目すべきなのは、MRだけでなく、随伴経験量とEL (男子は $r=.33$, 女子は $r=.29$) 及びPU (男子は $r=.39$, 女子は $r=.31$) との間にも.25以上の中程度の相関が認められたことである。これは、随伴経験量が全体としてのEIの向上に貢献していることを示している。

ただし、EIに含まれる下位能力であるMR、EL及びPUと孤独感との関係をみると、興味深いことが明らかになった。すなわち、男子ではMRと孤独感との相関 ($r=-.36$) が、EL ($r=-.19$) やPU ($r=-.21$) と孤独感との相関よりもやや高く、男子では随伴経験量がMRの水準を高め、その結果、孤独感が抑制されるという予想が支持されるが、いずれの下位能力も孤独感を抑制する方向に機能している。また、女子では、EIに含まれる3つの下位能力すべてが、孤独感の抑制に貢献していることになる (MRとの $r=-.37$; PUとの $r=-.31$; ELとの $r=-.36$)。したがって、MRが特に孤独感の抑制に貢献していると予想したが、EI全体が孤独感の抑制に貢献している可能性が示唆された。

そこで、Fig. 2に示すように、EL、PU及びMRを媒介変数として仮説モデルを設定し、随伴経験及び孤独感の観測変数を加えた分析を行った。その結果、上述した相関係数では、EI全体が孤独感を抑制する傾向が認められたが、パス係数は大きくないが、予想したように、MRの孤独感を抑制する効果 (-.14) のみが認められた。MRの水準と情動抑制が関係しているという実験的証拠は報告されているが (Toyota,

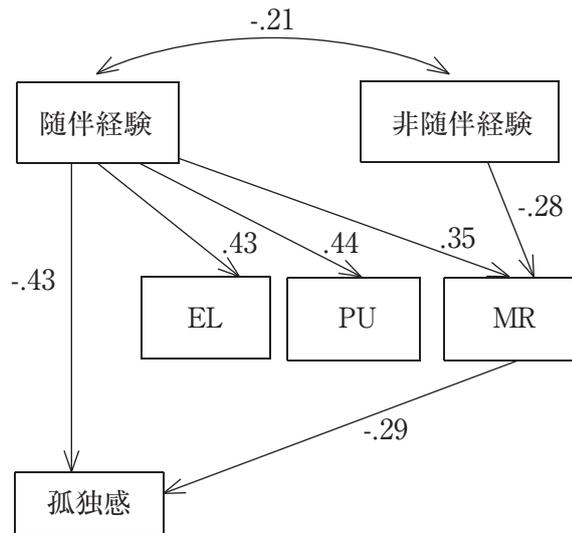


Fig. 3 6つの観測変数間の関係図

2013)、本研究においても、MRと情動抑制との関係が追証されたといえよう。

本研究の主な関心は、随伴経験にあったが、非随伴経験についても興味深い結果が見いだされた。すなわち、男女ともに、非随伴経験量は、MRと有意な負の相関（男子は $r=-.26$ 、女子は $r=-.17$ ）があったが、EL（男子は $r=-.06$ 、女子は $r=-.11$ ）及びPU（男子は $r=-.05$ 、女子は $r=-.02$ ）との間には、有意な負の相関は得られなかった。したがって、非随伴経験量の影響がEIの下位能力によって異なるということが示されたのである。では、何故、非随伴経験量がMRとのみ関係しているのであろうか。自分の努力が成果に結びつかない経験をすることで、不快な感情に左右され、それを制御できない経験も多くなり、その結果、自分の情動の制御に関して肯定的な認識をもてないのである。しかし、情動の制御能力は、不快な感情が喚起され、それを克服した結果、高められるものである。これは、ストレスを克服した経験によってストレス耐性が向上することと類似している。したがって、非随伴経験量が多いことによってMRの水準が低下することもあるが、非随伴経験量の最適水準についても検討課題である。

このように、随伴経験と非随伴経験ともに、MRに影響し、そのMR水準が孤独感の抑制に貢献する可能性が示された。Fig. 3には、最終的に、非随伴経験をモデルに入れた関係図が示されている。随伴及び非随伴経験によるMRを介しての孤独感の抑制効果が明確に示されている。なお、このモデルの適合度の指標であるGFIは.975、AGFIは.935、RMRは3.275であった。

しかし、随伴経験量と孤独感の相関係数は、男女ともに高く、直接的影響は大きい。ただし、Fig.1における直接的影響は、Fig. 2及び3と比較して小さい。

これは、友人への安心感を介する孤独感への抑制効果が、EIを介するそれよりも大きいことを示している。豊田ら（2007）は、居場所（安心できる人）とEIの両方の孤独感への抑制効果を強調したが、本研究の結果は、居場所（「友人」）への安心感がより重要であることを示すものである。

4. 総括的議論

4.1. 随伴経験量が孤独感に及ぼす効果を媒介する要因

本研究の第1の目的は、随伴経験量が友人への安心感を高め、その結果、孤独感が抑制される可能性を検討することであった。そして、その可能性を示唆した。すなわち、大学生においては、随伴経験によって友人への安心感を高めることによって、孤独感を低めることが期待できる。また、第2の目的は、随伴経験量がMRを高め、その結果、孤独感を抑制するという可能性を検討することであり、この可能性も示唆された。すなわち、大学生では随伴経験によって自分の情動を調整する能力が高まり、その結果、孤独感を低めることが期待できる。

一方、随伴経験量と孤独感の間を媒介する要因が、友人への安心感及びMRということになる。具体的に言えば、随伴経験量が多い者であっても、友人への安心感が高まらなると、孤独感が抑制されないということになる。また、随伴経験量が多くても、MRの水準が高まらなければ、孤独感が抑制されることはないのである。したがって、随伴経験が友人への安心感やMRの向上に貢献するか否かを規定する要因の検討が今後の課題である。

友人への安心感とMRを媒介要因として孤独感に及ぼす効果を議論してきたが、随伴経験の孤独感への直接的な抑制効果は相関係数の値としては明らかに存在する。したがって、それをそのまま解釈すると、随伴性の認識（誰かに関わる努力をすれば、相手から良い成果がもたらされるという考え）が孤独感を抑制する効果が大きいのである。しかし、随伴経験によって、個人内に随伴性の認識が生じたこと以外にも、何らかの個人内変化が生じる可能性があり、それを明らかにしないと、孤独感の抑制を説明することにはならない。随伴性の認識は、元々動機づけの概念であり、個人内の対人関係の動機づけ（意欲）が高まった可能性もある。本研究では、友人への安心感の向上とMR能力の向上を、上述した個人内変化に位置づけることができるが、今後は随伴経験によって生じる個人内変化を媒介変数として、さらに検討していかなくてはならない。

4.2. 随伴経験の重要性

牧ら（2003）が中学生を対象にして、随伴経験量と

自己効力感の関係を明らかにして以来、豊田（2006）が大学生における自尊感情及び自己効力感との関係、自我構造との関係（豊田, 2010）、EI及び孤独感との関係（豊田ら, 2012）、平石（1990）による自己肯定意識との関係（豊田・濱邊・浦, 2013）を明らかにしてきた。このように、随伴経験は、適応を規定する重要な要因であることがわかるが、大学生を含めた青年が随伴経験を増やすには、問題がある。それは、青年が没頭できる活動を意識できていないことである（豊田ら, 2012）。随伴経験は、本人が自我関与を高め、没頭できる活動の中で経験するものである。それ故、今、自我関与の高い没頭できる活動がない青年は、随伴経験における自我関与の高い努力をしないし、成功しても、失敗しても、自我関与がないので、成果としての認識も生じない。それ故、本当の意味での随伴経験を体験できないことになる。したがって、青年が何かの活動に没頭できるように方向づけが必要である。スクール・サポーターを希望する学生が多いが、それは、児童・生徒に対する学習・生活指導に充実感を見いだしているのであろう。できれば、スクール・サポーター以外にも、大学生が、このような教育実践に関わる活動に没頭できる具体的な方策が望まれる。

5. 引用文献

- 平石賢二 1990 青年期における自己意識の構造 自己確立感と自己拡散感からみた心理学的健康 教育心理学研究 **38**, 320-329.
- 板津裕己 1989 自己受容尺度短縮版 (SASSV) 作成の試み 応用心理学研究, **14**, 59-65.
- 牧郁子・関口由香・山田幸恵・根建金男 2003 主観的随伴経験が中学生の無気力感に及ぼす影響 教育心理学研究, **51**, 298-307.
- Maslow, A. H. 1962 Toward a psychology of being. Princeton, N.J.: D.Van Nostrand Co. (マスロー A.H. 上田吉一 (訳) 1964 完全なる人間－魂のめざすもの 誠信書房)
- 諸井克英 1991 改訂版UCLA孤独感尺度の次元性の検討 静岡大学文学部 人文論集, **42**, 23-51.
- Salovey, P., & Mayer, J. D. 1990 Emotional intelligence. *Imagination, Cognition and Personality*, **9**, 185-211.
- 豊田弘司 2003 教育心理学入門－心理学による教育方法の充実－ 小林出版
- 豊田弘司 2006 大学生の自尊感情と自己効力感に及ぼす随伴・非随伴経験の効果 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要, **15**, 7-10.
- 豊田弘司 2008 女子大学生における情動知能に及ぼす共感経験の効果 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要, **17**, 23-27.
- 豊田弘司 2009 孤独感に及ぼす居場所（「安心できる人」）の効果－評定尺度による検討－奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要, **18**, 39-43.
- Toyota, H. 2009 The person who eases your mind “*Ibasyo*” and emotional intelligence in interpersonal adaptation. *Horizons of Psychology*, **18**, 3, 23-34.
- 豊田弘司 2010 大学生における自我構造、自尊感情及び随伴経験の関係 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要, **19**, 1-5.
- Toyota, H. 2011 Differences in relationship between emotional intelligence and self-acceptance as function of gender and *ibasho* (a person who eases the mind) of Japanese undergraduates. *Psychological Topics*, **20**, 3, 449-459.
- Toyota, H. 2013 The self-choice effects on memory and individual differences in emotional intelligence. *Japanese Psychological Research*, **55**, 45-57.
- 豊田弘司・牧田理紗・木原華子 2012 居場所、情動知能及び随伴経験が孤独感に及ぼす効果 奈良教育大学紀要, **61**, 35-41.
- Toyota, H., Morita, T., & Takšić, V. 2007 Development of a Japanese version of the Emotional Skills and Competence Questionnaire. *Perceptual and Motor Skills*, **105**, 469-476.
- 豊田弘司・大賀香織・岡村季光 2007 居場所（「安心できる人」）と情動知能が孤独感に及ぼす効果 奈良教育大学紀要, **56**, 41-45.
- 豊田弘司・濱邊友里・浦 瑞帆 2013 学習場面における随伴経験尺度の開発 奈良教育大学教育実践開発研究センター研究紀要, **22**, 27-33.
- 豊田弘司・島津美野 2006 主観的随伴経験と情動知能が感情に及ぼす影響 奈良教育大学紀要, **55**, 27-34.
- 山本真理子・松井豊・山成由起子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64-69.